説教20210418 使徒4：5-12　ルカ24：36-48

「恐れと喜び」 151　512　148

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

イースターおめでとうございます！

今日の説教題は恐れと喜びですが、副題として、隅っこと真ん中という題も掲げたいと思います。イエス様は弟子たちの真ん中に立ち、そして弟子たちは法廷で真ん中に立たされたのでした。

さて、今、すみっコぐらしというキャラクターが子どもたちのあいだで人気のようです。１９の個性的なキャラクターが、一つの隅っこに集められて、共感しあいながら一緒に生活をするようになるその姿が、大人から子どもまで幅広い人たちの心をつかんだのでありましょう。その姿は、真ん中で活躍することを期待され、強いられようとする今の社会への拒否反応や風刺にも見受けられます。

　又、それは、孤独に陥りがちな今の社会で、心を開いて慰めあえる唯一のユートピアを探し求める気持ちの反映でもありましょう。

説教の冒頭からなぜこの話を引き合いに出したかといいますと、この１９のキャラクターたちが、今日の聖書箇所に出てまいります弟子たちの姿に似ていると思ったからです。１１人の弟子とその仲間たちはイエス様が十字架に挙げられ、エルサレムの人々がその十字架を中心にして、熱狂して狂乱していた時には、それぞれの場所に散らされていました。あるものは十字架の元で涙を流し、あるものは恐れからイエス様を見捨てて十字架から遠く離れ去りました。そしてあるものは疑いの心を持ってさまよっていました。

そしてイエス様が十字架上で死なれてからは、彼らはエルサレムの街にある一つの家に集まって、息をひそめて時を過ごしていたのです。一つの家で過ごすそんな彼らは、まさにすみっコぐらしをしているかのようです。

　このように家の中で過ごす彼らの真ん中にイエス様が立って「あなたがたに平和があるように」と言われたとき、最初、弟子たちは全く嬉しくなかった。むしろイエス様をみて恐れおののいたのでした。それはなぜかと言いますと、イエス様がまた顕れることを全く期待していなかったからです。この時の弟子たちにしてみれば、一時は大いに期待して全ての望みを掛けていたイエス様が、本当に無残な姿で十字架上で死なれた、という事は絶望以外の何物でもありませんでした。そのイエス様が再び私達のところに来られてもろくなことにならない、などど思ったのかもしれません。彼らは、このイエス様の登場にうろたえて、真ん中に立っているイエス様を逃れてすみっコに逃げようとしているかのようです。恐ろしくてイエス様の姿もみたくなかったでありましょう。

　このように、死んだ人と今もなおこの地上を生きる人の間柄というのは、死による別れによって解消されることはなく、ずっとつづいていくものです。そして、その関係性を祝福し、喜びに満ちたものにされるのは、イエス様御自身であります。

　こうして復活して弟子たちの真ん中に立たれたイエス様は、すみっコに逃げ惑う弟子たちにこういわれます。「どうしてうろたえているのか、どうして心に疑いを起こすのか」と。この時、弟子たちは既に自分なりの人生設計を各自の心の内に持っていたのかもしれません。イエス様なきあとにはもう自分自身の力で何とか生きていくしかありませんから、彼らは肩寄せ合ってすみっコ暮らしをはじめようとしていたのかも知れません。はっきり言えば、この時の弟子たちにはイエス様は必要がなかったのでした。

　確かにイエス様は弟子たちの真ん中に立たれたのですけれども、弟子たちは心の中で、そのイエス様をすみっコへと押しやっていたのです。自分たちが一度見捨ててしまったイエス様を、また心の真ん中へとお迎えすることは、弟子たちには怖くてすぐに出来ることではありませんでした。

　しかし、そのようなうろたえる弟子たちに対し、イエス様は「私の手や足をみなさい」といって、手足を近づけたのです。その手足には十字架上で穿たれた釘のあとが残っていたのです。それは十字架上での痛みと苦しみを思い起こさせるに十分な傷跡だったでしょう。しかし、そのイエス様を見つめる弟子たちには不思議と喜びが満ち溢れてきたのです。この時の体験は時間にしてみればほんの一瞬だったかも知れません。しかし、すみっコぐらしの小さな平和を求め始めていた弟子たちの向きを変えさせるのには十分な出来事でした。この時、イエス様の手足に残された傷跡は、自ずとその痛みや苦しみを思い起こさせます。しかし、イエス様は御自身の内にそれらを請け負われて、かえって苦しみを喜びへと変えられたのでした。それは弟子たちを苦しめるのではなく、喜びに導くためでした。それでも完全に信じられない弟子たちに向かって、更にイエス様は「ここに何か食べ物があるか」といって、差し出された、一切れの焼き魚を、彼らの前で、おいしそうに食べられたのでした。

　イエス様の復活という事は私達人間にとっては奇跡であり、信じられない出来事です。ですから、イエスさまはその信じられない出来事を、何とか私達に悟らせようとして、次々とその業を弟子たちの前で披露されたのでした。しかし、この時イエス様がなされた業というは、弟子たちに自分の手足を見せられたこと、そして、出された焼き魚を食べられたことであります。これらの業は、奇跡でもなく、誰でもやっている日常の行いにすぎません。しかし、そのような日常の行いを通して、イエス様が私達に、復活の喜びを伝えられたことには大きな意味があります。それは私達が簡単に見習い行うことが出来る日常の業なのです。

　私達は、このように焼き魚を食卓に並べて、頂き、そしてお互いの姿を確認しあうという日常の業を通して、次第に、復活の命の喜びへと近づいていくことでしょう。そして、知らない間に、私達の真ん中にイエス様がいつも立っていてくれることになるでしょう。それは、私達が、自分の思いで、すみっコぐらしのほうに逃れて小さな平和を得ようとしている試みから、向きを変えて、永遠に続く喜びの方へと向かう道行きであります。このようにして、私達は、各自の心の中心にイエス様をお迎えしていくことになるでしょう。

　イエスキリストの十字架というのは、釘あとから血潮したたる、痛みと苦しみに満ちた残酷な者であります。そしてそこには私達人間の持つ罪があらわにされています。そしてこの十字架の出来事によって、私達の罪を帳消しにし、かえって私達を恐れから喜びへと、導いてくれるのは、イエス様以外には出来ないことです。今日の聖書箇所でイエス様は、具体的にその業によって、その喜びに至る道を示して下さったのです。

　イエス様が私達の真ん中に立って、今なお告げ知らされています、その復活の喜びは、私達には計り知れない大きな者であります。ですから私達が、その喜びとは、こんなことだとか、あんなことだといって頭に思い描けるものでもありません。私達に出来ることはは、ただ、今日のイエス様が弟子たちになされた業を思い起こしながら、イエス様を自分の心の中心へと招き入れることです。

永遠の喜びが実現するのは、自分たちの世代の内に実現するとは限りません。そして自分の死によって、その望みが絶たれることでもないのです。イエス様は、時が来れば死すべき今の私達の中心におられて、私達を永遠の喜びの、復活の体へと導いておられます。この聖書と言う書物は、そのことを、最初から最後まで一貫して語っています。そこには多くの苦しみや悲しみも出てきますが、イエス様は今日の話のように、常にその苦しみ悲しみを喜び、希望へと変えて下さいます。今日は、そのイエス様に共に感謝と賛美の歌声をあげてまいりたいと思います。

さて、今日のルカによる福音書の聖書箇所は、「わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」という御言葉で終わっていますが、ここで語られています、「父が約束されたもの」というのが聖霊であります。聖霊は、主なる神の霊であり、私達が良い技を成すときのよりどころです。今年は、その聖霊が私たちのところに下される聖霊降臨の主日が5月23日になります。ペンテコステの主日とも言います。私達はその日に向けて日々歩んでまいりたいと願います。

　今日与えられました使徒言行録の聖書箇所は、そのペンテコステ、聖霊降臨の出来事があった後のことが書かれています。今日のルカによる福音書での出来事から2ケ月程あとの出来事です。使徒たちは、議員、長老、律法学者といった、時のユダヤ人社会の中心にいたリーダーたちによって、最高法院の法廷に立たされます。７節をみますと、「使徒たちを真ん中に立たせて」というように、わざとルカによる福音書の「イエスご自身が彼らの真ん中に立ち、」と同じ、真ん中という表現を用いています。

　ここで、弟子たちのなかでも、特に臆病者であった、ペトロが、大胆にも最高法院の真ん中に立って、議員や長老、律法学者といった時のリーダーたちを向こうに廻して、堂々とイエスキリストのことを言い表すことが出来たのはなぜでしょうか。

彼は、今日のルカによる福音書でもみて来ましたように、すみっコぐらしをする者から、イエス様を自分の中心へ置く者へと、向きを変えられていました。それは彼のところにやってきたイエス様を彼が受け入れたという事です。

　そして今や、ペトロは図らずも、社会の中心に躍り出ています。このこともペトロ自身が画策したことではなくて、なんだか知らない間に最高法廷に立たされて、証言をする仕儀となったのでした。この時のペトロを支える者とは何だったのでしょうか。それは言うまでもなく、彼の中心にいるイエス様によって彼は支えられたのですが、今やペトロの内ではあらゆる恐れは喜びへと変えられているのです。ペトロは喜びに満ちて「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」といってイエス様のことを証言したでありましょう。

11節の「この方こそ、／『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、／隅の親石となった石』／です。」というのは、旧約聖書の詩編に出てきます、イエスキリストを預言する聖句の引用です。イエス様は、ユダヤ人社会のリーダーたちに命奪われ、捨て去られたけれども、その不要に思われた石こそがイエス様であり、私達が中心に据えるべき親石だったということです。

　私達は、ペテロたちが徐々に、イエス様を自分の中心に迎え入れ、遂に社会の中心に立たされたことを覚えたいと思います。それは、今の社会の常識である、自分が自分の活躍によって中心に躍り出るという発想とは全く違うことです。

　そうではなくて、イエス様が私達の真ん中に立たれているのは、私達が自分を捨てて、自分の中心にイエス様を迎え入れ、すみっコから真ん中に立っておられるイエス様を見つめて、日々共に暮らしていく為です。私達は時に、何もしないで留まっていたり、時に真ん中に立たされて話をするようになる時も来るでしょう。その全ての時を、私達の中心におられるイエス様が祝福し、私達の歩みを守っていて下さるのです。

お祈りいたします

天の

あなたは、天に召されたもの、そして未だ地にある者たち、全ての真ん中におられます。どうか私達が、あなたからの御言葉一つ一つを受け入れて、主の平和のうちを歩めるようにして下さい。そして、私達もその御言葉を語る者とされ、どこにいましても、主の平和を作り出すものとなさしめてください。

今、社会の片隅で、苦悩し嘆き悲しんでおられる方々が多くいます。どうか私達が、弟子たちのように、恐れることなくあなたの御言葉をその方々に告げ知らせていくことが出来ますように。

私達は、この先が見通せない世の中にあって、救いの道を探し求めています。そのもがき苦しむ中にあっても、必要な時に与えられる、あなたからの平和の安息に身を委ね、今一度、永遠の喜びへと向かう道を定めていくことが出来ますように。

父と聖霊と共に一体であって